

【学術論文】

米海軍政府の軍政要員
—— ハンナとワトキンス ——

U.S. Civil Affairs Officers
—— Hanna and Watkins ——

与那覇 恵 子

要旨

米軍初期占領下の沖縄において、壊滅状態となった沖縄の政治経済、教育文化の復興に携わった米軍政府の米軍将校、兵士がいる。彼らは海軍のエリートであり知識人であり、「軍政要員」として訓練された人々であった。

「軍政要員はどのようなキャリアや考えをもち、初期占領下の沖縄においてどのような役割を果たしたのか」が本論のリサーチ・クエスチョンである。その問いに答えるため、軍政要員の中でも特に名前が知られているハンナとワトキンスに焦点を当て、彼らの人物像、考え方、沖縄における活動について沖縄側、米軍側両者の資料を基に調査した。

高学歴の研究者である彼らは占領地となる地域の歴史文化をよく理解していた。その任務は住民と共に戦後の地域復興に従事し、占領環境を整備するというものであった。彼らの活動は沖縄の初期占領が基地の島沖縄としての本格占領に続く環境を整備するという米軍にとっての役割を果たした。しかし、地域住民と共に戦後復興を助けるという役割をも果たした彼らは、その人柄、考え方、沖縄への理解など、軍人的視点よりも文化的視点を持ち、初期占領下沖縄の指導者にとってアメリカの良心的存在であった。

キーワード：米軍占領下の沖縄、軍政要員、役割

はじめに

戦争で荒廃した戦後沖縄の小学校設立は米軍の命によるものであった。米軍は教育担当の兵士や将校を通して、占領下の沖縄における学校教育を管理、運営し、沖縄の教育関係者や政治家は米軍政府の教育担当や政治担当らと連絡を取り合い交渉しながら教育・政治を行った。戦後占領下の沖縄の教育・政治は、彼ら米軍の教育担当や政治担当との関わりを抜きにしては成り立たなかったのである。沖縄側の資料にはそのような軍政要員の人物評が時折登場する。沖縄側もやみくもに米軍の命令に従ったわけではなく、時に論争し抵抗しつつ難局を切り抜けてきた訳だが、その中で米軍関係者がどのような人物かを見極めることは交渉上重要なことであったと思われる。1950年当時文教部長だった屋良朝苗(1969)も、ある人物を酷評した後「沖縄群島の教育部長はコバート氏でこの人は誠意のある人でありました。」(p.138)などと書く。そのような沖縄側の指導者に好評であった米軍

関係者の中でも、特に沖縄の教育関係者や政治家の記憶に残る人々、戦後沖縄の教育・文化・政治史に名を刻む人々がいる。戦後の学校教育発足に努力、貢献したハンナ、諮詢会との連絡係りとしてメンバーと交流し、ワトキンス文書を残したワトキンスなどの軍政要員である。「彼ら(軍政要員)はどのようなキャリアや考えをもち、初期占領下の沖縄においてどのような役割を果たしたのか。」本論はそのような疑問に答えるものである。沖縄側、米軍側両者の資料を基にその疑問に答えることは、初期占領下の沖縄における軍政要員が沖縄にとって、又、米軍政府にとってどういう意味を持っていたかを示すもので、米軍初期占領下の沖縄の歴史や特性を知るうえで欠かせない。本論は、沖縄での彼らの貢献のみならず本国に帰ってからの沖縄との関わりも捉えており、又、米軍側の一次資料からハンナが米軍についてどう考えていたか、ワトキンスの「猫とねずみ」論は2度、異なる場所で提供されていた可能性が高いなどを提示している点で新しい。

本論を進めるにあたり定義しておくべき用語は軍政要員である。海軍省発行の資料である「米国陸軍及び海軍の軍政と軍政要員に関するマニュアル」(FM 27-5 (OPNAV 50E-3), the United States Army and Navy Manual of Military Government and Civil Affairs (22 December 1943) によれば、「軍政要員 (Civil affairs officers) は軍政下で市民を管理する役割を果たす。戦闘下においては戦闘に従事し、占領下においては市民を管理することによって市民が軍の業務を妨げることはないよう軍政を支えることである」とされている。Civil affairs officer の日本語訳には軍政要員と民政要員とがあるが、本論で扱う要員達が活躍したのは米海軍政府が治める初期占領下という時期であることから軍政要員が適切であると判断し、本論では軍政要員とした。1946年7月軍政は海軍から陸軍へ移管されたが、海軍所属の軍政要員はしかしながら、陸軍における要員が十分に補給されるまで継続して働いていた。それは陸軍からの要求によるものであった¹⁾。そのような事実も頭に入れておく必要がある。

I ハンナ少佐

1. 米軍側資料に見るハンナ

ハンナについて1945年10月の米海軍政府の配置では、Lt. W. A. Hana・・・Welfare & Ed. となっており²⁾、1946年の資料 U.S. Naval Military Government のTelephone Directory では Education・・・Lt. Cdr. W.A. Hanna と記されている³⁾。終戦直後の沖縄では安全や衛生面での welfare(福祉)は学校教育と同時に管理されなければならないものであった。1946年1月2日に出された Directive number86 では Okinawa Education System として以下

の組織図を示している⁴⁾。

ハンナは米海軍軍政教育担当 The Headquarters Education Officer (教育部将校・文教将校) で「沖縄の文教部と直接関わって働き、米軍政府からの物資の供給を管理し政策とその処理についてのすべての事柄を扱う」任務を担当していた。1946年1月の Directive Number 89 では、Education Department の役割は、地域の文化活動促進や図書館、歴史、文化関連情報の保存にまで広がる⁵⁾。ハンナの活躍が教育関係にとどまらず、図書館、博物館、芸能活動の保存など多くにわたったゆえんである。

そのような任務を負ったハンナだが、Lawrence H Chamberlainが提出したコロンビア大学への研究応募書類には執筆者の一人として以下のように紹介されている。

Willard Anderson Hanna : 1911年8月3日生まれ。1932年ウースターで学士1937年オハイオ州で修士1940年ミシガン大学で博士号取得、専門分野は英語。又、コロラド州ボルダーのアメリカ海軍日本語学校、コロンビアの軍政府海軍学校 (Naval School of Military Government and Administration at Columbia) で学び中国やミシガン州ノーマン大学やミシガン大学で教べんを取る。短編や小説を出版。コロンビアでの成績は非常に優秀。海外に出る前に日本語翻訳部隊に勤務。沖縄では教育や芸術分野の担当となる。彼の指示の下、沖縄の人々により管理、運営されるまでに沖縄の教育が復興した⁶⁾。

教育や文化関連に携わり沖縄の教育の復興を成し得、沖縄側に引き継いだとその貢献が記されている。ワトキンス文書刊行に際し寄せられたコルドウェルの論文での人物紹介には以下のように紹介されている。

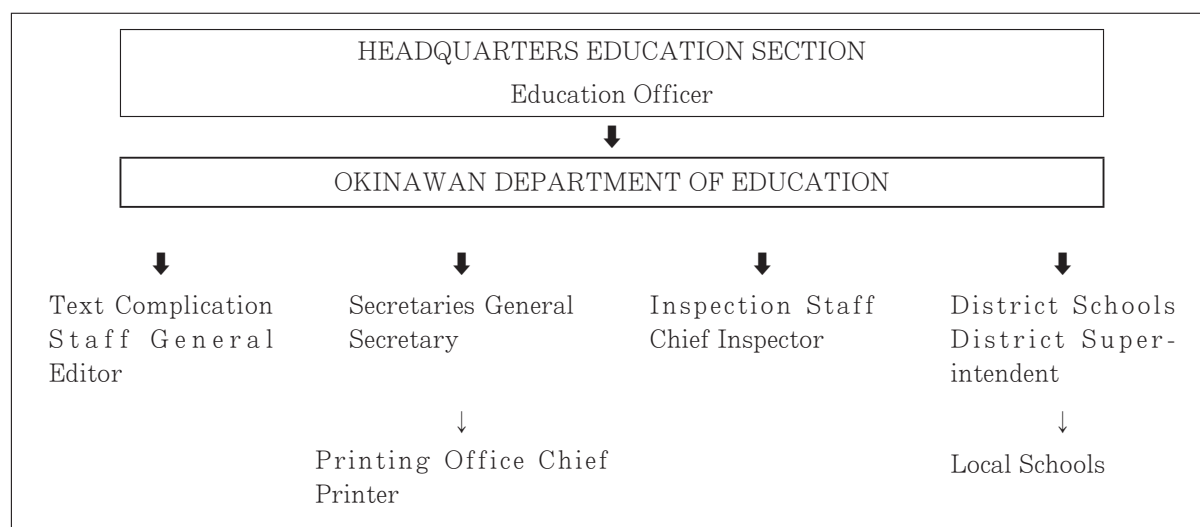


図1 Okinawa Education System

Willard “Red” Hanna：沖縄の文化を守るために徹底して貢献した。地域の芸術家、美術家を集め再生の機会を提供し学校教育を再開した。重要な沖縄の文化財（円覚寺の鐘など）が占領軍に盗まれることを防止し（沖縄の文化財の重要性について）米軍兵士を教育した⁷⁾。

フィリピン兵士に盗まれた沖縄の貴重な文化財の返却や米兵への沖縄の文化についての教育などの貢献についても触れられている。ハンナが教育と芸能（文化）両分野の担当であったことや沖縄側の記録に見られるように、教育、文化両面においてハンナの貢献度が高かったことがわかる。

Sgt. BlochによるLt Hannaへのインタビュー⁸⁾によるとハンナはニューヨークのCol MG coursesで太平洋の諸島について、又、Lt KerrのもとでFormosa(台湾)について、それぞれ研究している。(Background in education)は東洋、中国である。この2つの研究グループは琉球ハンドブックを編纂している。つまり彼は沖縄、琉球について教育担当者となる前にその文化や歴史を学習していたのである。それが沖縄の人々や文化への理解や思いやりに繋がり、沖縄の人々に尊敬に値する人物として好印象を与えたのだ。異文化理解が地域の人々を理解する第一歩であることを示している。

仲宗根(1973)は直接住民に接する米軍将校の日本語のうまさ不思議に思い尋ねているが「海軍でも陸軍でも500人ずつを選抜して11ヶ月日本語の勉強をさせた。毎日16時間ずつ日本語の猛勉強を続けた」との返事を得て、アメリカの日本占領は段違いの相手と暮をうっているのと同じで打つ手は先に用意されていることがわかる気がする感想を述べている。直接住民と接触する教育担当となったのであるから、又、上記でわかるようにコロラド州のボルダーの語学学校やコロンビア大学の海軍政府の学校で日本語を学習しておりハンナの日本語力も高かったと思われる。島袋(1982)もハンナは「日本語が上手で」(p.194)と書いている。

Blochによるハンナへのインタビューで、ハンナは3つのMGセクションであるEducation-Religion-ArtsとMonumentを担当していたが、できるだけ早く小学校レベルでの教育を再開しなければならないと感じていた。彼は沖縄の人々について「本質的に攻撃的な人々ではないので日本人との間にも余りトラブルはなかった」とし、「反日でもなければ日本に忠実という訳でもなく日本化しているようで沖縄の独自性を持っている」と分析する。又、軍が強盗したり焼き払ったり破壊したりの蛮行をしても嫌悪したり敵対しないことは感嘆すべきことであると、軍幹部は手に負えない状態の軍隊に責任をもつべきであり、統率がとれているべき軍隊が全く無

秩序な状態に陥っていることを嘆いている。”Shameful performance” by American troops. Most remarkable that people don't bear ill will against us because of that. と表現している。沖縄の人々が米兵の蛮行に敵対しない理由について、紙や本など軍が与える贈り物(souvenir)欲しさ故なのか、それともここでは状況が違うのかと不思議がっている。当時の沖縄の人々の無抵抗には、軍に刃向かうと物がもらえないということもあっただろうし、戦争に負けた精神的ショックで気力を失っていたということもあっただろうし、敗者としてそのみじめさを受け入れなければならないと観念していたこともあっただろう。又、日本軍の横暴さに比べて米軍がまだましだという思いもあっただろうと考えられる⁹⁾。

その複雑な思いは沖縄の教育者達の述懐にも表れている。兼城(1973)は終戦直後の大人の精神状態を「緑の島沖縄は、アメリカ軍の撃ち込んだ砲弾ですっかり荒れ果てていた。人の心も同様に荒れ果てていた。砲弾は山や川や砂浜だけでなく人の心にも大量に撃ち込まれたのだった。」と終戦直後の大人の無気力感について述べ、物不足の中、軍にすべてを頼らなければならない状況を「いい年をした校長がいかにか校舎設立のためとはいえ、太鼓もちみたいに汗をふきふきこびへつらわなければならないのだから喜劇であった。痛恨の極みとはまさにこのことで、戦争に勝てば勝ったで困ることが沢山あったであろうが、つくづく敗戦を恨まずにはいられなかった」と嘆いている。敗戦の惨めな物不足の中、生きるだけで精一杯の必死さ、辛さをかみしめながら、米軍の暴挙や傲慢を我慢していた占領される側の思いは、いかに教養があったにしても勝利者であり占領する側であったハンナには理解しがたいものがあつたと言える。

ハンナは前記のBlochとのインタビューで、教育については多くのことが予想外であったとし「すべての教科書、全ての文具、すべての校舎が破壊し尽くされていた」と述べている。軍の機能については「誰も何をすべきか具体的な仕事内容を把握できていないことが問題だ」と指摘する。軍において、教育の分野は余計なものとか思われてなく、それに対する政策も無い上にどこに指示をあおいでいいのかさえわからない状況である故、今やそれを問うこともしなくなってしまっていると述べている。軍の活動の妨げとなる子供達を遠ざけておきたいために収容所での学校設立が急がされたが、就任するまでそれが問題とされていることを知らなかったと述べている。そして1ヶ月前にゴーサインがもらえたので、ガリ版刷り教科書に現在取り組んでいることを語っている。彼は、教育はまず健康・衛生や福利の面で行われるべきであると述べる。軍の教育への無関心と政策の無さを嘆きながら、それでもほぼ一人で奮闘していた彼

の教育への真摯な姿勢や思いが伺われるインタビュー内容である。又、軍の小学校設立の目的を就任するまで知らなかったと答えている点、米軍の教育への無関心さを嘆く点など、軍人的視点からではなく、文化人的視点から沖縄の戦後の教育復興を真摯に考えていたのではないかと思われる。

2. 沖縄側資料に見るハンナ

ハンナは米軍占領下の沖縄における教育・文化関連資料で最も多くその名を目にする軍政要員である。1946年2月26日付けの文教時報第一号は教育機構や義務教育の実施、授業時数、軍事的国粹的教育訓練についてなどを通知しているが、沖縄文教部長山城篤男と連名のウィラード・A・ハンナの肩書は米国海軍軍政府、文教将校、海軍少佐となっている¹⁰⁾。彼は下の図で示されるように沖縄の教育者達で構成される文教部を指導する立場にいた。

下の図からわかるようにハンナは戦後沖縄の教育関係でトップの位置にあった。米国海軍軍政府部長として1946年4月5日に沖縄文教部長に山城篤男を任命している¹¹⁾。上の表ではハンナのそばにサムソン少佐という人物の名前があるが、その他の資料に彼の名前を発見することは出来ない。教育部将校としてハンナの活躍がひと

きわ秀でていたということだろう。1945年から46年の海軍による米軍占領下における沖縄の記録を見る限り、ハンナは沖縄の人々誰にも良い印象を与え尊敬された人物である。

「ひめゆり部隊」の引率教員で米軍占領下の沖縄で最初に教科書を編集した仲宗根政善は、ハンナ少佐との付き合いの濃かった人物である。彼は新崎盛暉(1982)とのインタビューの中でハンナ少佐について、沖縄の歴史もよく調べていて見識の高い学者であり「博物館の建物も修理して首里あたりの壕なんかにも兵隊をやって、あっちこっち沖縄の骨董品を一生懸命、集めていました。」と沖縄にもりっぱな文化があったことを米兵に知らせるため一生懸命だったと評している。図書収集にも熱心で、戦火から残った書物を一か所に集めていた家を米兵が全部焼いてしまったと大変憤慨していたという逸話も紹介している。ハンナ少佐に比べて、仲宗根は「君らは食糧はないない言っているが、福木の実がいっぱいになっているではないか。食べてごらん」と山城部長に強いた彼の次の教育将校は実にくだらない男だったと述べる。ただ命令に従うのではなく時には反論し、常にアメリカ将兵たちの人物見定めをしていた沖縄の人々の視点が興味深い。

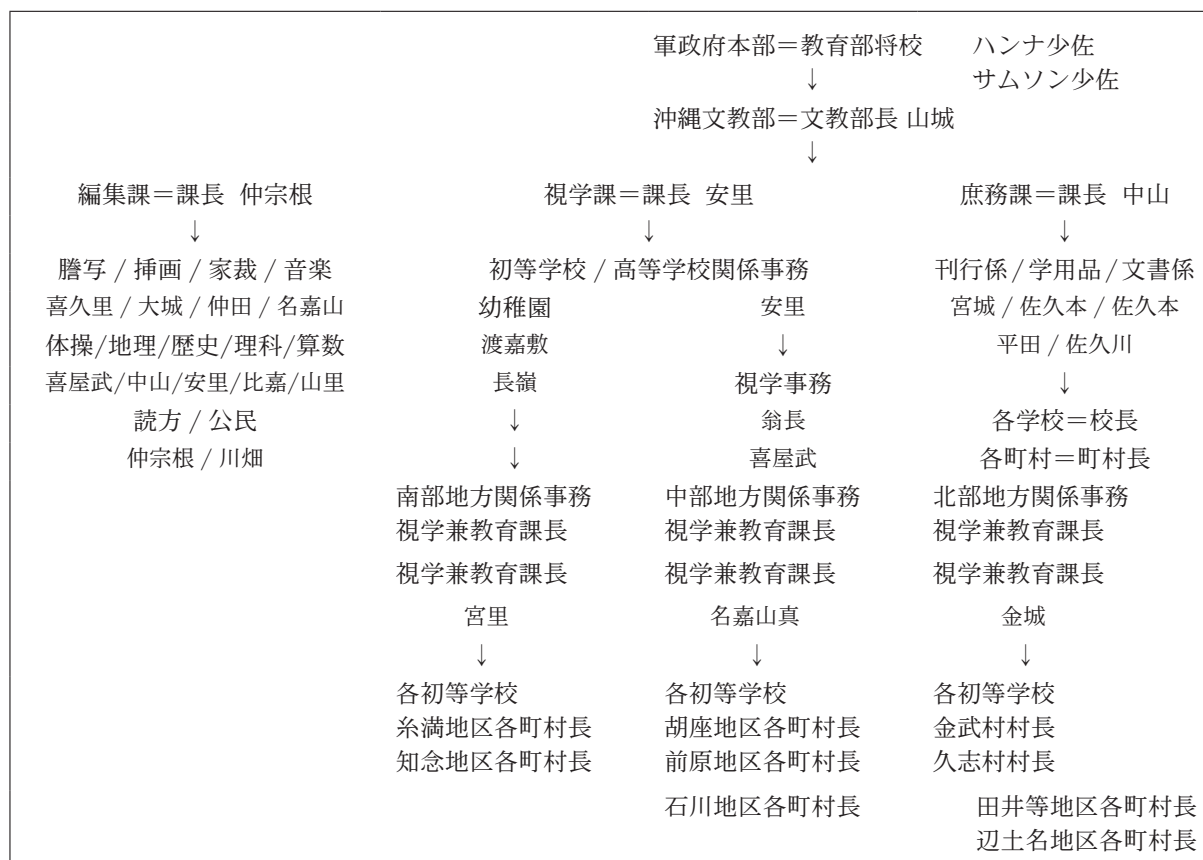


図2 玉城 嗣久「沖縄占領教育政策とアメリカの公教育」p.21

諮詢会のメンバー仲宗根源和(1955)もハンナとの付き合いがあった人物だが、「ハンナ少佐の名は戦後の沖縄教育再建の礎を築いてくれた恩人として今なお人々の心に温い思い出を数多く残している」と書き、「教科書づくりのために各収容所を訪ね人材を募っていた」(p.150)と語る。仲宗根はハンナのことを教科書編纂の仕事を進めさせる一方、戦争で教員が沢山死んで不足になっており補充するための速成の方法をとろうと教員養成の学校を石川に近い平良川におくことになったとし¹²⁾、教育再建に専念してくれるだけでなく、自ら真先にたって焼け残りの家や壕や墓などから書籍、陶磁器その他の文化財を集めてきて今日の東恩納博物館の基礎を築いてくれた功績は永久に記憶さるべきと彼の功績を讃えている。

琉球新報は「失われた文化財鮮明に」との見出しのもと、中城御殿の石垣や歴代琉球王の位牌など米元少佐が収集した写真200点余が寄贈されたとハンナのことを以下のように伝えている。

沖縄戦当初の1945年4月から終結後46年10月まで沖縄に滞在し、沖縄陳列館(後の東恩納博物館)の設立など戦後沖縄の文化、教育の復興に尽力したウィラード・A・ハンナ博士(故人)＝当時米海軍少佐＝が撮影・収集した200点余の写真がこのほど、琉米歴史研究会(喜舎場静夫理事長)に贈られた。写真には砲弾を浴びて一部だけ残った中城御殿の石垣の全景や、首里住民が廃虚の寺の中からかき集めてまつた歴代琉球王の位牌など終戦直後の文化財の状態を知る上で貴重な風景が鮮明に映し出されている¹³⁾。

沖縄の芸能文化の保護におけるハンナの貢献については島袋光裕(1982)が書いている。1945年6月長男夫婦、次男夫婦、三女四女を戦争で失い呆然と過ごす中ハンナ少佐に呼び出され、芸能団を組織し各地で芝居を行いたいと芸能人の居所を教えてほしいと頼まれる。顔ぶれがそろそろと彼らを前にしてハンナは説いた。「沖縄は激しい戦いのためにすべてが灰に帰ってしまった。おそらく完全に残っているのは皆さんが持っている芸能だけであろう。沖縄の人々も今は虚脱状態にあるが、一日も早く心の糧を与えなければならぬ。同時に米軍にも沖縄を認識させる必要がある。それには芸能を復興させて沖縄の人にも米軍にも見せてやるのが一番の近道だ。」(p.195～195) 衣装や化粧品、稽古場等難儀の末、8月20日「沖縄芸能連盟」が発足、彼は米軍占領政策に芸能復興を取り入れた意図は知らないものの砲煙の残る中、芸能人を住民の宣撫、米軍慰問にあたらせたことはまさに画期的であったと評する。

3. 座談会「ハンナ博士と沖縄」に見るハンナ

ハンナは沖縄の教育関係者にどのような影響を与えたのだろうか。琉球新報1955年11月9日～11月15日(5回掲載)に「ハンナ博士と沖縄」と題してハンナについて語る座談会の内容が掲載されている¹⁴⁾。出席者は当時の文教部や文教学校や外語学校などの教育関係者で以下のメンバーである。山城篤男(文教部長)、城間朝教(文教部員)、島袋俊一(文教学校長)、翁長俊朗(外語学校長)、中山盛茂(文教部員)、比嘉徳太郎(文教部員)、外間政章(外語学校職員)、野崎真一(文教部員)、大城皓也(文教部員)、山元恵一(文教部員)、島袋光裕(文教部員)、大嶺薫(文教部員)である。以下、琉球新報の記事を参照、あるいは引用して参加者がハンナという人物や彼が与えた影響についてどう捉えているのかを見てみよう。

文教部長の山城は4月24日民政府が創立されるまでハンナの直属の委員であった。45年4月1日米軍上陸と共に沖縄に来てその翌年46年の8月に帰国したハンナは背が高く貴公子然としていたと話す。自分のことを「軍人ではあるが文化人である」と言い、教科書を作ろうと古い教科書を壕の中に探し回った。次に教員不足の問題解決のため師範学校を創ることに尽力し土地を田場に決定した。沖縄の文化に造詣が深く、首里城下の壕の中から資料や文化財を引き出し保管し、美術家や劇団を大切にした。彼が書いたショート・ヒストリー・オブ・オキナワの序文には「沖縄の人がみすばらしいなりをしているからと見損なってはいけない。かつては絢爛たる文化を誇っていたのだ」とあったと語る。

図書館長であった城間朝教はハンナに連れられ那覇の図書館跡を訪ねたが何も残っていなかった。訓練学校(文教、外語、農林)の舎監長と経理部長をしたが食糧事情が悪く、係りの2世に相談してもラチがあかずハンナに相談したところすぐ米や缶詰を調達してくれた。図書がない中で図書館づくりを相談したところ上海で接收した3千冊の日本軍の本を持ってきて図書館を開設することになったと話す。

文教学校設立時について、当時校長であった島袋俊一は湯飲み茶わん一杯程度の食事で食糧事情が悪く、職員も生徒も家族を抱えて寒さに震えている状態でハンナに話したところ食糧を補給、毛布を工面してくれ大変ありがたかったと語る。

教育課長をしていた外間正章は前原高校設立後、生徒数が増え続けるのでハイスクールを拡張したいとハンナに相談し、工兵隊跡の膨大な施設をもらっている。内地に疎開した家族と連絡がとれず困っていたがハンナが手紙を郵送させてくれたとその愛情深さに感謝する。

野崎真一は「米人には珍しいほど貴公子的な方で無欲恬淡であった」「沖縄の文化と人々を心から愛している

という人だった」とハンナを評する。

画家で教科書の挿絵を描いた大城皓也は貧窮していたがハンナの紹介で買ってくれそうな人に絵を売ることができたと述べ、同じく教科書の挿絵を描いていた山城恵一も東恩納にハンナがアトリエを作ってくれた、妻がマラリヤに罹った時も世話をしてくれたと感謝する。

島袋光裕は戦後、沖縄の芸能もこれでおしまいだと観念していたが、ハンナが生き残った芸能関係者を集め復興を図った。皆を前に「沖縄はすべてがなくなってしまった。残っているのは音楽と芸能だけだ。その素晴らしい文化をどうにかして保存しようじゃないか」と語ったという話を披露している。約一か年で軍民合わせて287回慰問演劇をしたが、ハンナは開演に先立ち兵士にきちんとボタンをはめて見るよう注意をしたという。又、米人向けにテンポの速いものを作ったが古典もやるようにと頼まれた。古典舞踊にも造詣の深いハンナは古典舞踊の手足の動きに感服していたという。心から芸術を愛し芸能を支援する気持ちがあったと話す。島袋は又、非常にお世話になったので帰米に際しトングラブンをとお土産にとあげたら博物館に収めるべきものと返しにきたというが、ワトキンスにも似たような話がある¹⁵⁾。

博物館長であった大嶺薫はハンナと一緒に東恩納博物館をつくり、管理していた。ハンナは「沖縄一千年の文化財が灰燼に帰して見る影もなくなり、これでは南方の非文化民族と変わるところがないので、古文化財を収集し博物館を創ろう」と45年の8月から事業に着手したと語る。山城は円覚寺の鐘がフィリピンに持ち去られていたのを返してもらったのもハンナの努力のおかげだと話す。大嶺はハンナはいったん決心したら後には引けないという気質で、それが東恩納博物館が立派に整理できた主な理由だと思うと最後に述べている。

座談会に参加した一人一人が語るハンナへの思いには共通したものがあり、どの人の話からもハンナが軍の任務以上の熱意と愛情をもって沖縄の教育や文化の復興に努力、貢献したことがわかる。その人となり業績がわかる内容だ。短期間でほぼ一人で沖縄における教育、文化、図書館、芸能、美術と多方面にわたり活躍したことには驚嘆する。任務を果たしただけなのかもしれないが、沖縄の人々同様あるいはそれ以上に戦争で破壊し尽くされてしまった沖縄の文化的価値を理解し、その文化に対する敬意や愛情、そしてそれらすべての財産を戦争で失ってしまった沖縄の人々への心からの同情がなければできなかったことだ。直接接していれば、人柄はおのずと知れてくるものである。表面的な行動では、このように多くの沖縄の知識人たちの心を捉えることはできなかったらうと考える。

II ワトキンス少佐

1. 米国側資料に見るワトキンス

ワトキンスは米軍組織の中で政治部長を務めていた。アーノルドはワトキンスについて「海軍の軍政府に対する貢献に関する彼の理解は筆者にとってきわめて有用であり、彼との会話を通じて沖縄の初期の民事要員の多くを動機付けた理想主義の精神を理解できた」と述べている¹⁶⁾。ワトキンスはハンナとともにアメリカの理想主義を米軍占領下の沖縄においても追及しようと努力したと捉えることができる。彼は以下のように紹介されている。

James Thomas Watkins IV-editor : 1907年11月8日生まれ。1929年スタンフォード大学で学士、1934年修士、1941年博士号取得。専攻分野は国際関係。ハーバード大学ジュネーブの Inst. Des Hautes Etudes, 又コロンビアの軍政府海軍学校 (Naval School of Military Government and Administration at Columbia) でも学ぶ。日本、中国、さらにスタンフォード大学、シカゴ大学、オハイオ州立大学にて教べんを取る。1943年から1946年までアメリカ海軍予備軍で勤務した後教壇に戻り、現在はスタンフォード大学の国際関係の准教授である。海軍学校での親友の一人で彼は卒業後台湾研究部隊の副局長 (assistant director of the Taiwan research unit) として数か月勤務した。沖縄では米軍上陸2週間目から1946年7月1日まで勤務。軍政府役員として軍政府から民政府への移行にも貢献した¹⁷⁾。

ワトキンス文書刊行にあわせてコルドウェルが寄せた論文の人物紹介では以下のように紹介されている。

Jim Watkins : 大変高貴で、利己主義から程遠い人物。郵便部隊を監督し兵士のもとへ郵便物が届くよう貢献した。戦死した兵士の家族へのメッセージを届け、軍政府の行動日誌を記録した。帰国後は軍政府に関する学術的な詳細の記録に努め、その資料はスタンフォード大学のフーバー図書館に収められている。沖縄では終始その社会や政治学に関する知識によって新しい政府設立において慎重かつ賢明な方法が取れるよう尽力した。彼なしに私の仕事は成就しなかったらう¹⁸⁾。

ワトキンスは米国帰国後も諮詢会のメンバーと手紙のやり取りをしている。手紙の内容はdear and unselfishと評される彼の人柄を示すものだ。例えば志喜屋にあてた手紙はワトキンスが米国へ帰国してから3か月後に書かれているが、住民と直接接触していた彼ら軍政要員が強者の占領者としてではなく友人に近い感覚で接していたことがわかる内容である。スタンフォード大学

で「極東における国際関係」や「日本の政府」「国際機構」を教え、新渡戸稲造のように米国と日本の平和、協力、相互理解のための架け橋となりたいと希望を述べている。そしてムーレー (Murray) 大佐、カルドウェル (Caldwell)、ローレンス (Lawrence)、ハンナ (Hanna) のその後の消息について詳細を伝える。又、バースオフ (Berthoff) が彼を訪ねてきたことや現在ハーバード大学に在ることを伝えた後、彼がハンナの後継者から拒否され沖縄に居続けることができなかったことを残念に思い、最後に「しかたがない」という日本語を添えている。”In my opinion, however, Mr. Berthoff would have been valuable in spite of his youth because he knew and liked Okinawa.”¹⁹⁾ という文章からはできるなら沖縄のためになる人物をと考えた彼の気持ちが伝わる。

1955年5月9日琉球大学学長の呉屋朝章あてに書かれた手紙の内容もその人柄と帰国後の彼と沖縄のかかわりを示すものといえる。

美しい島 (沖縄) に滞在中、首里城は戦争後無残な残骸をさらしており、そこを通るたびに私は悲しい思いをしていました。しかし今日、それが貴殿の大学として生まれ変わることとなりました。今や首里城のあった丘を見る時未来を夢見ることができます。いつかスタンフォード大学を訪問していただいたお礼に琉球大学を訪問できたと考えています²⁰⁾。

“When I sojourned on your beautiful island, the site of Shuri Castle was a desolate war ruin. I was saddened every time I passed by it.” という表現に彼の人柄を見る。ワトキンスは帰国後 “Friends of Okinawa” という沖縄に援助物資を送って復興を支える組織にも関わっているが、組織の目的は以下である。

自立独立していた (沖縄の) 人々の復興を手助けしたいと考える人々にその手段 (機会) を提供すること。彼らは日本の拡張主義の最初の犠牲者であり米軍によるさらなる苦難の犠牲となっている。その独特の文化や貢献が失われることを防ぐ²¹⁾。

メンバーは委員長ガーランド・イヴァンズ・ホプキンズ (Rev. Garland Evans Hopkins) で副委員長仲村しんぎ (N.Y.), 湧川せいじ, 比嘉せいけん, C.兼次 (all in Honolulu) Chauneey M. Dopuy Jr. (Pennsylvania) James T. Watkins (California) の複数名があり, Secretary-Treasurer Josse S Shima, (Washington, D.C.) Assistant Secretary-Treasurer, Bernard C. Brannon, (Washington, D.C.) Editor, Carl W. Sternfelt, (Massachusetts) Executive Secretary, Miss Helen L. Sawyers (Washington, D.C.) となっている。ガーランド牧師がハワイに在る沖縄県人と共に立ち上げ、沖縄の理

解者をメンバーに構成された組織であると考えられる。委員長であったGarland Evans Hopkinsはワトキンスの紹介でコルドウェルに対しExecutive Committeeのメンバーになってほしいとの手紙を送っている²²⁾。手紙は「ワトキンスが貴殿が沖縄に興味関心を抱いていると教えてくださいました。」で始まり彼は自身のことを「私も沖縄との縁があり1945年秋に沖縄の社会について調査をしました。」と紹介し組織のことを「党派や主義に囚われず沖縄の福祉と文化の復興に関心のある組織」と説明している。興味深いのは、組織の目的が、かつて独立し独自の文化をもっていた沖縄は過去の日本の拡張主義、今の米軍占領の犠牲者であると捉え、その復興に寄与するとしていることで、組織のメンバーとしてワトキンスが沖縄をどう捉えていたかを示すものとなっている。

2. 沖縄側の資料に見るワトキンス

「沖縄戦後教育史」は1936年沖縄県教育会の付属機関として首里城北殿に開館された沖縄郷土博物館が沖縄の博物館のこう矢と紹介する。1944年10月10日の空襲後、博物館の所蔵物の本土疎開を陳情したが許されず、やむなく首里城内の洞穴に避難させたが終戦後一物も残っていなかった。首里城には地下壕が掘られ日本軍の本部として使用され、米軍の激しい攻撃に晒されたのだ。その博物館の戦後の復興としては、1945年、8月米国海軍政府のワトキンス少佐とハンナ大尉によって石川市東恩納の民家を転用して沖縄陳列館が設立された。彼らはここに陳列された沖縄の文化や歴史、芸術に関する事物を米軍政府の将校や米国の両院議員、政治家に観覧させ、沖縄文化を理解してもらおうと努めたのだ。沖縄陳列館はその後東恩納博物館と改称され、沖縄の美術工芸品を収集陳列、各地区の史跡名勝の調査保存に努め、英文の「沖縄歴史」「沖縄文化写真」を作成し、参観の米軍将校の沖縄理解に寄与した。その収蔵物は1949年6月14日現在で、陶器179点であったとされる²³⁾。

博物館については1945年12月24日の諮詢会 (軍民協議会) に以下の内容が記録されている。ワトキンスは「博物館は主として米兵に観覧させ、ムーレー邸宅は高級将校等に紹介したい」として米兵や将校に沖縄の文化を深めるための功策を練っている。そして「諸委員等は沖縄は食糧なども不十分であるのに何で斯かることに力を入れられるだろうと考えられるかも知れない」と言い「博物館及びムーレー大佐の邸宅の計画は軍政府の命令でもなく、軍政府でやれということでもない。之はハンナ大尉と私との考えでやっているものである。ハンナ大尉と私は日本及び支那の文化の程度も知っている。沖縄の文化の程度も知らしめたい。沖縄の文化も此程度あったのだと知らしめたいのである。」と説明している。又、比

嘉委員の「日本全国の県と比例して沖縄は国定指定の多かった所であったから之も付加すると尚沖縄の文化がわかると思うが」との返答に「文化を物語る文化史を設けたい。沖縄の文化を求める本を調べたい。沖縄に関する著書を調べてもらいたい」と締めくくっている²⁴⁾。この「軍政府の命令ではなくハンナと自分の2人で考えてやっている」との発言は、その他の諮詢会記録を含めてのワトキンスの印象、諮詢委員に対する説明に感じる率直で誠実な姿勢から、又、ハンナがインタビューで「軍において、教育の分野は余計なものと思われてなく、それに対する政策も無い上にどこに指示をあおいでいいのかさえわからない状況である故、今やそれを問うこともしなくなってしまう」と述べていることから、真実であると捉えるべきであろう。ハンナやワトキンスは各自、文化部長、政治部長を命じられていたが、その任務の詳細について上からの指示は特になかったような状況であったと考えられる。

諮詢会で工務部長だった安谷屋(1974)は沖縄諮詢会から沖縄民政府までの約4か年の間に交渉をもった米軍将兵の中で、諮詢会発足当時の海軍軍政府政治部長モルドック中佐と、陸軍軍政府と交替する直前の最後の海軍軍政府政治部長ワトキンス中佐を印象深く忘れがたい言葉を残した人々として挙げる。ワトキンスの場合は海軍から陸軍に交替する直前、諮詢委員に別れの挨拶をした際、「固く結束せよ。要求すべきは強く主張せよ。一度できなければ二度でも三度でも押し。」と真剣に忠告されたことが深く印象に残っていると述べている。「軍は怖い。何をするかわからないから結束せよ。」という暗示もあったと語る。

同じく諮詢会のメンバーで社会事業部長を務めた仲宗根(1973)は1952年4月から90数日間書き続けた米軍占領下初期の沖縄についての新聞連載の中で、ワトキンスの人柄について「いたっておとなしい、物柔らかい態度の人である。米国海軍少佐には違いないが、どうも受ける感じは軍人さんという感じがしない。」と書く。「名古屋の高等学校で先生としていたということで一語一語はっきり発音する」ので、仲宗根にも通訳なしで70~80%わかったという。ある日、同じ諮詢会のメンバーの又吉康和がりっぱに表装した軸物をあげようとしたところ、ワトキンスは「沖縄は戦争のために沢山の祖先からの価値ある遺物を失ってしまったから、せめて現在残っているものだけは大切に沖縄に保存しておくべき」と丁寧に断り、なお熱心にその書を眺めた後静かに帰って行ったという。仲宗根は「ワトキンス少佐のこの立派な態度は心ある人々を深く感銘させたことは言うまでもない」と書き残している。

3. 「猫とネズミ論」に見るワトキンス

ワトキンスが海軍軍政府から陸軍に移行する直前に沖縄のリーダーたちに「猫とネズミ」のたとえでその心構えを説いた話は戦後初期米軍占領下の沖縄の歴史上よく知られている。その「猫とネズミ論」について諮詢会のメンバー比嘉善男(1978)が書いている。東恩納の政府構内で百人くらいの人たちを前にしての講話だったという。沖縄住民が自治を要望して政治的な運動を始めようとする動きに対して注意を与えておこうという趣旨のもので、陸軍軍政に代わると厳しくなるという警告あるいは揆を一つにする説話だったかもしれないと述べている。発言内容は「この沖縄の美しい自然も短時間ではできなかつた。人の社会の秩序も自由も平和も時間がかかってできる。アメリカはいつまでも沖縄を占領し続ける意志はないし領土にしようとも思っていない。協力すればきっと自由は得られる。一部の人たちは急いで自由を得ようとしてきたばかりの軍政府や民政府を非難しているが、秩序を回復し自由を得るためには時間がかかることを理解してほしい。」と今の所沖縄はネズミでアメリカは猫で、ネズミは猫の許す範囲でしか自由は得られないとわかりやすく説明しようとしたという。比嘉はワトキンス少佐の真意は、しばらくは猫を怒らさないよう忍耐強く民の力を養う努力をするよう要望することだったし、皆それはよくわかっていたのだが、猫はいつでもネズミを取って食べてしまうことができるのだから言うことを聞けと脅したというように後になって伝わったと聞いたと記す。

太田(1984)はワトキンスのたとえ話は彼の善意から出たものとはいえ、軍政初期の軍政長官の絶大な権力に比べ、沖縄住民の立場がいかに弱いものであったかを端的に物語るとする。ワトキンスは平和条約が締結されるまではネコがネズミに飛びかからないよう気をつけねばならないが、平和条約が結ばれた暁には沖縄住民の声も軍政に反映されると語ったがそうはならなかったと書く。「アメリカはいつまでも沖縄を占領し続ける意志はないし領土にしようとも思っていない。」(p.57)と言ったワトキンスの言葉は彼の正直な気持ちであつたらうが、それはアメリカの真意ではなかつた。このような軍政要員と軍のギャップは後の土地問題にも表出した。フィッシュ(1988)は「基地開発計画を進めるために軍司令官は新たな土地を必要としたが、他方、軍政要員は軍がすでに占有している土地の開放を求め続けた。」と書く。ハンナやワトキンスはアメリカの理想を心から信じる数少ない軍関係者であつたといえる。フィッシュは「(土地問題は)軍政府の多くの業績を損ねるものである。結局それは米国の民主主義の理念を沖縄人に植える米国の努力を損ねた。」と批判する。ハンナやワトキンスの

果たした業績は米軍政府による基地計画のための土地接収によって大きく損ねられたのである。その後の長きにわたる米軍の数々の占領政策によって、占領者としての米国が民主主義とは真逆の存在であるという事実を沖縄の住民は学ぶことになる。占領下初期におけるハンナやワトキンスら軍政要員の存在は、そのなかからうじて見出すことのできた米国の良心であったといえるのかもしれない。

しかしながら、軍政要員たちも米軍の指揮下にあることに変わりはなく、軍の組織の一員として動いていたことも又確かなことであった。ワトキンスの「猫とネズミ論」は軍政府が出したDirective No.11 (1945/09/29)にある沖縄の米軍政府の組織と政策実行の中のその使命を読むとよく理解できる²⁵⁾。その米海軍軍政府の使命は次の3点である。

1. 上位当局からの指令に従って住民を統治する
2. 軍の需要（要求）の範囲内で住民の経済、社会、政治的組織の回復、復興を統括する。
3. 米軍によって住民に課せられた規則や規定を実施する

上記2にあるように、ハンナやワトキンスの沖縄住民のための復興も軍の需要（要求）の範囲内での活動であった。そのような指令が頭にあつてのワトキンスの例え話であったと考えられる。ワトキンス自身の好意から出たものであったのではあるが、その例え話は住民からの反発を買うことにもなった。米軍占領下の沖縄の厳しい現実を踏まえて現実的対応を取る方が今のところ沖縄にとって安全であるとする彼の考えは、理解はできるもののそれでも沖縄住民にとっては屈辱的であったのである。彼の安全志向を示す「猫とネズミ論」は比嘉の記した講話以前の諮詢会記録にすでに示されている。

それは1946年4月18日（木）の記録である²⁶⁾。県会議員と執行機関部長との兼任はできないので議員を推薦するようにとの軍政府（ワトキンス）の要求に、執行機関部長の仲宗根源和が「議員に戻りたい」との意見を出す。理由を問われ仲宗根は「民意の代表として沖縄に尽くしたいという信念を持っている」と答えるが、それに対し軍政府（ワトキンス）は「米国では、民衆の声は重大視しているが、しかし沖縄は敵国であるから民衆の声は無い」に始まり「陸海軍も組織機構は民衆政治は喜ばない。その見解は人民と相当開きがある。陸海軍の将校は政治に幼稚である。デモクラシーも知らない。軍の方針に沿わないものは軍方針で抑えるから一方には与えたり一方には抑えたりする。」と陸海軍の状況を説明する。そして、「最初モードック中佐の意向としてはデモクラシーを基礎として作ろうとしたが米国にないデモクラシーの型で長官からペシャンコにされた」と内部事情も暴露し

「デモクラシーを直ちに持っていきよりは一步一步持って行った方が安全ではないか」と説く。「危険が伴うと思うのは民衆の声が軍政府に沿わない時が危険である。軍政府に対する反対等は起りやすいがこの反対をした時は困難になる。沖縄の政治は沖縄人の行動如何に決す」と言い「猫とネズミ論」を披露している。「例えば軍政府は猫で沖縄はネズミである。猫の許す範囲しかネズミは遊べない。猫とネズミは今良い友達だが猫の考えが違った場合は困る。私もムーレー大佐もカールエル少佐も長らくは居ない。居る間に政治機構を見たいので急激になった。危険を伴っては軍政府の後継ぎが来て民衆の声が反対に出た場合は沖縄民政の危険がある。」さらに「講和条約の成るまでは民衆の声は認めもしない。又あり得べきものでない。平和会議の後帰属が決まった後民衆の声も反映するだろう。講和会議の済むまでは米軍政府の権力は絶対である。今後は軍人として来るので今は顧問として大学教授が居る。私、カールエル少佐、ローレンス少佐、ハンナ少佐が長官の後に居るが後任は軍人のみであるから相当の権力で行くのではないか」と述べている。

上記会議録にあるようにワトキンスの「猫とネズミ論」はすでに諮詢会で述べられ出席者は志喜屋、又吉、松岡、比嘉、仲宗根、平田、前門、安谷屋、仲村、當銘、糸数、當山、玉城、護得久、山城の諸委員となっている。比嘉もその時出席しており、百人くらいの集会の講話で話したという記憶は記憶違いなのかとも思えるが、しかし比嘉の述べる「米国はいつまでも沖縄を占領するつもりはない」などのワトキンス発言は見当たらないし、ワトキンスの発言内容が多くの沖縄の人々の反感をかったということはその後、比嘉がいうように政府構内での講話で100名くらいの人々に対し同じような内容の発言をしたのだと考えられる。発言の中の「平和条約が結ばれるまでは」という表現は平和条約が結ばれば米国の占領は終了するとの解釈になる。しかしながら、その後の沖縄の状況はそのようなワトキンスの考えの甘さを示すものとなった。そのワトキンスの発言からわかることは、彼もハンナ同様、米軍の真の意向に疎かったという事実である。それはフィッシュの「基地開発計画を進めるために軍司令官は新たな土地を必要としたが、他方、軍政要員は軍がすでに占有している土地の解放を求め続けた。」の記述にも示されていると言える。

結論

ハンナやワトキンスのように沖縄の人々から一様に評価、賞賛されている米軍関係者はまれだ。ミルズ（1969）は海軍にはエリートが多かったとするがまさに彼らはそ

のようなエリートであり、米軍という組織で軍政要員としての役割を果たした。宮城（1982）は軍政要員の沖縄の歴史に関する知識は住民の中の知的階層の信頼と尊敬を得るために利用できるとの示唆は的中したと述べる。平良研一（1982）もハンナの業績を評価する一方で、そのハンナの高い評価はまた、当時の文化政策が対住民宣撫工作としての効果を発揮したことを意味すると述べる。つまりハンナは有能な「宣撫工作担当将校」であったとして評価される一面をもつ。軍政要員の場合、その役割は戦争で壊滅した沖縄の戦後復興であったが、基地沖縄の基盤作りともなったことを考えると、彼らの貢献に敬意を表し感謝する反面、その評価も複雑なものにならざるを得ないということは確かである。ハンナやワトキンスの個人としての善意や理想を信じることはできるものの、軍政要員の任務が「占領下においては市民を管理することによって市民が軍の業務を妨げることはないよう軍政を支えること」であったこと、「猫とネズミ論」が象徴するように、その善意や理想も国の戦略範囲内のものでしかなかったことは事実である。

しかしながら、彼らの言動を辿ると、組織の中での役割を超えた個人的思いが存在したこと、アメリカの理想、民主主義を信じそれに沿って行動しようとした数少ない人々であったことがわかる。物心両面で沖縄の教育、文化、政治の復興を支えた彼らの貢献なしには、すべてが破壊し尽くされた終戦直後の沖縄における教育も文教部や諮詢会の運営も成立しなかった。彼らは、軍の組織の一員ではあったが、軍人的視点よりも文化人的視点を持ち、軍の真の目的に疎く、軍幹部を批判する姿勢を持っていた。ハンナは沖縄の教育・文化の復興を、ワトキンスは政治組織における自治の復興を純粹に望んでいたと考えられる。そうでなければ、米国に帰国した後も沖縄との関わりを継続し沖縄に貢献しようとする姿勢を維持することはできないだろう。占領下の厳しい現実の中で米軍との交渉を通して生き延びなければならなかった沖縄の指導者は、人物を見極める確かな眼はもっていたと考える。彼らが高く評価するハンナとワトキンスは、厳しい米軍占領下における軍組織の一員であったとしても、その任務が沖縄のさらなる占領環境を整えることになったとしても、彼ら軍政要員は沖縄の人々にとってアメリカの良心的存在であったと言える。

註

¹⁾ (Memo, CNO to JCS, 6 Mar 46, sub: Mil. Govern. Administration in the Ryukyu Islands, and memo, U.S. Army CofS to JCS, 22 Mar 46, same sub., both parts of JCS 819/11,819/12, CCS File 383.21

(4-13-44), Sec., 2, RG 218.)

²⁾ 沖縄戦後初期占領資料 (Papers of James T Watkins) 24巻 (緑林堂1994) 23 沖縄県立公文書館所蔵 Stanford Univ. Hoover research institute (R3-1065)

³⁾ 同書, 24巻, p.66 (R3-1108)

⁴⁾ 同書, 29巻, p.180 (R4-905)

⁵⁾ 同書, 29巻, p.184 (R4-909) The Education Department is further charged with the responsibility for supervision and encouragement of other cultural activities of the local people. In particular it will continue the work assembling libraries, collecting information on historical and cultural matters, maintaining the Military Government exhibit of Okinawan cultural remain at Higaonna and managing the troupe of Okinawan entertainers now on circuit.

⁶⁾ 同書, 94巻, p.41 (R17-574)

⁷⁾ 同書, 解題・総目次, p.42

⁸⁾ The Ryukyu Papers-Background Papers regarding Military Government Operation on Okinawa (1945) 124-126 WAH-6- '55 (沖縄県立公文書館所蔵) 資料コード00005-001

⁹⁾ 沖縄戦では日本軍による住民への攻撃が多く証言されている。

沖縄の証言 (下) 名嘉正八郎 谷川健一 中央公論 1971年

沖縄戦再体験 安谷屋政昭 (あにや まさあき) 編著 1983年

¹⁰⁾ 沖縄県公文書館所蔵『琉球史料』第3集 (琉球政府文教局, 1958) p.10 資料コード G80003793B

¹¹⁾ 沖縄県公文書館所蔵『琉球史料』第3集 (琉球政府文教局, 1958) p.23 資料コード G80003793B

¹²⁾ 教員養成の学校が文教学校のことを指すとすれば平良川ではなく田場のはずであるが、源和の文章をそのまま生かした。

¹³⁾ 琉球新報2006年5月9日

¹⁴⁾ 琉球新報1955年11月9日～11月15日 (5回掲載)

¹⁵⁾ 本論 p.11～12

¹⁶⁾ アーノルド・フィッシュ『琉球列島の軍政』沖縄県史資料編 I 1988

¹⁷⁾ 沖縄戦後初期占領資料 (Papers of James T Watkins) 94巻 (緑林堂1994) 40 沖縄県立公文書館所蔵 Stanford Univ. Hoover research institute (R17-573)

¹⁸⁾ 同書, 解題・総目次 42

¹⁹⁾ 同書, 94巻 p.8-9

²⁰⁾ 同書, 94巻 p.95

²¹⁾ 同書, 94巻 p.37-38

²²⁾ 同書, 94巻 p.53

- ²³⁾ 沖縄県教育委員会『沖縄の戦後教育史』(1977) p.808-809
- ²⁴⁾ 沖縄県教育委員会『沖縄県史料』沖縄諮詢会記録(1986) p.234
- ²⁵⁾ 沖縄県公文書館所蔵 資料コード0000010896 海軍軍政府指令11号(1945・09・29) Naval Military Gov. Directive No.11
- ²⁶⁾ 沖縄県公文書館所蔵 資料コードR00160114B会議録IVp.124

参考文献・引用文献

- アーノルド・フィッシュ『琉球列島の軍政』沖縄県史資料編 I 1988
- 安谷屋正量『激動の時代に生きて—88年の歩み—』(1974)
- 新崎盛暉『沖縄現代史の証言』(沖縄タイムス社, 1982)
- 太田昌秀『沖縄の帝王 高等弁務官』(久米書房, 1984)
- 兼城賢松『沖縄の教師の祈りとどけ』(講談社, 1973)
- C.W. Mills (1969) Power elite
- 島袋光裕『石扇回顧録・沖縄芸能物語琉球史料』(沖縄タイムス社, 1982)
- 平良研一「占領初期の沖縄における社会教育政策—『文化部』の政策と活動を中心に—」1982沖縄大学紀要(2):p.31-63
- 玉城嗣久『沖縄占領教育政策とアメリカの公教育』(東信堂, 1987)
- 仲宗根源和『沖縄から琉球へ』(評論社, 1955)
- 比嘉善男『わたしの戦後秘話』(文教図書, 1978)
- 宮城悦二郎『占領者の眼』(那覇出版社, 1982)
- 屋良朝苗『沖縄の夜明け』(あゆみ出版社, 1969年)

U.S. Civil Affairs Officers

— Hanna and Watkins —

YONAHA Keiko

Abstract

In Okinawa under the early U.S. occupation, there existed U.S. military personnel who contributed to restore the war-devastated political system, economy, culture, and education. They were the elites of the Navy, intelligent people trained to be civil affairs officers. “What background and what kind of ideas did they have and what role did they play in Okinawa under U.S. occupation?” This is the research question of this paper. The paper attempts to answer this question by referring to the writings of the Okinawan side and those of the U.S. military side.

Their main role was being engaged in restoring Okinawa and preparing the environment for the occupation. Although this was the US military government’s role that they played, their honest attitude of being empathetic to Okinawan residents was respected and well-evaluated by Okinawan leaders as the people who represented America’s conscience.

Keywords: Okinawa under US occupation, Civil affairs officers, role